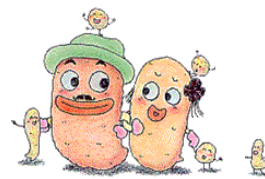


# 湯戸飛夜いけいけだよ



Jinen Joe family

発行 西徳山まちづくりの会

記事:

- ・花いっぱい運動  
戸田駅前広場環境  
美化への取り組み
- ・連載小説  
『男でござる 新  
説天野屋利兵衛』  
第7回
- ・シリーズ「名所・  
旧跡めぐり」  
戸田の“馬頭観  
音”
- ・戸田駅前ピアガー  
デン  
「まちづくり納涼  
祭」を開店しまし  
た
- ・今後の行事予定

会員募集中

あなたも「西徳山  
まちづくりの会」  
で一緒に活動しま  
せんか。会では、  
常時、会員を募集  
しています。

E-mail :

nishitokuyamamatizuk  
urinokai@gmail.com

花いっぱい運動

## 戸田駅前広場環境美化への取り組み

令和4年9月6日未明の台風11号の強い風のため、戸田駅構内とポケットパークを隔てるフェンスは傾き、花壇では、背の高い向日葵、秋桜は折れてしまいました。また、背の低い花たちも元気がありません。7～8月は水遣り当番で花を見守ってきたのにと残念ですが、まだまだ、綺麗な花を咲かせていますので、ぜひ一度見に来てください。



コロナ禍でイベント開催が困難の中、私たちは戸田駅前の環境美化に軸足を置き、戸田駅前花壇のお世話をしています。周南市花壇コンクールでは、令和2年度は特別賞、令和3年度は優秀賞を頂き、「令和4年度は最優秀賞だ」と気炎を上げて花育てに邁進していましたが、残念ながら花壇コンクールは令和3年度で終了となりました。しかし、「ねえねえ、最近戸田駅前、綺麗になったと思わない。」、「地下道を上がったところ、植木が切り揃えてあるの。こんな所に植木があったんだと初めて知ったわ。」との巷の声を聞き、会員のたゆまない努力を評価してもらっているのだと、引き続き花育てを頑張ろうと思いを新たにしました。

花壇のお世話と併せて、ポケットパークのゴミ拾いなどを行っていますが、タバコの投げ捨てや空き缶などが見受けられます。道はゴミ箱ではありません。ゴミはゴミ箱に捨てる。綺麗にする人より汚す人が多いければ、環境はどんどん悪化します。環境美化にはひとりびとりの心がけが重要です。

環境美化への皆様のご協力をお願いします。



連載小説

『男でござる 新説天野屋利兵衛』

第七回 文城山 耕作

廻船問屋(貳)

程なくして当主と思われる人物が現れた。柔和でありながらもまっすぐに喜兵衛を見つめる目は人の心を見透かすように涼やかだ。喜兵衛はこの人には誠実でなければならぬと思ひ、またこの人なら信頼できる。この人についていこう。と直感で感じ取るのであった。

「あなたが喜兵衛さんですか。」

「はい、私は長州徳山藩の四郎谷という所からやってまいりました喜兵衛というものでございます。」

「私は三代目天野屋利兵衛です。この天野屋は代々利兵衛という名を継いでおります。あなたは元徳山藩のご家老の神村将監様のご子息で、なんでも商人になりたいとやらと聞いております。神村様には長州の塩の運送にあたって、お骨折りをいただいて誠に世話になっております。」

「はい、神村の倅でございます。」

「天野屋は三十艘の船を持って商いをしています。多くは各国のお大名の荷を取り扱っています。瀬戸内のお大名の米などを堂島の蔵屋敷まで運んだり、扱うのは蔵米ばかりではありません

ん。喜兵衛さんが乗ってきた船のように塩などの各地の特産品を運んだりしております。天野屋ではいろいろな仕事をしておりますが、喜兵衛さんほどんな仕事をしたいのですか。」

「わたくしは船に乗り組んでの仕事がしてみたいと存じます。ご主人様のご恩に報いるよう一生懸命働きます。」

「そうですか。それなら信吉が先導をしている船がよいでしょう。江戸から信吉が帰ってきたら、さっそくその船に乗り組んでもらいましょう。」

このようにして、喜兵衛は天野屋の船の乗組員として、三田尻で初めて出会った船頭の信吉の下で働くことになったのである。

喜兵衛はたちまち仕事を覚えて、めきめきとその頭角を現していくのだった。あの航海日誌も几帳面に書いていく。経験を積むに従い航海日誌というよりも安全航行の手本のようなものになっていった。そして、脇船頭からついに船頭へと昇進をしていき、ついに一層の船を任された。

喜兵衛は、実によく働いた。書物も暇があれば読んで、知識もたくさん蓄えた。荷物の扱ひも丁寧で、積み下ろしも迅速で、荷主からの信頼も厚いし、乗組員からも慕われた。商人たちからの売買も的確で、書画・骨董・陶器などの美術品に対する目も十分に養

われているため、天野屋にも多くの利益をもたらした。

ある時、喜兵衛が下船して休暇を取っていると、当主の利兵衛から呼び出された。天野屋の奥の部屋へ行くと、三代目利兵衛が目を細めて喜兵衛を迎えた。

「喜兵衛、初めてここで出会ってからすでに八年が経つ。お前も二十三歳になった。これまで本当によく働いてくれた。おかげで天野屋の屋台骨もすっかりしたもものになった。礼を言う。神村様も大いに喜んでおられることだろう。ところで、私には娘が二人いるのを知っているだろう。娘はおるが、息子はいない。」

「はい、存じております。あの気立てがよくて別嬪さんのお嬢様たちのごとは知らない者はおりません。あのお嬢様方がどうかしましたか。」

四代目天野屋利兵衛(壹)

廻船問屋天野屋は、代々名前は利兵衛を継いでいる。喜兵衛が四郎谷から出て、堺の廻船問屋天野屋に世話になった時の当主は、三代目である。

三代目は養子である。やはり若いころ天野屋の世話になり、その頭の良さとは人一倍の努力で廻問屋の手代になったのである。二代目の利兵衛には娘しかいないので、何とか養子をとって、天野屋の後を継がせたいと思ひ、娘の

滝にその手代を婿養子に迎えて、三代目の利兵衛になったのである。

そして、三代目もまた女房の滝との間に、娘が二人いる。天野屋は女系の家なのかも知れない。三代目と妻の滝との間の娘は、梅と琴といって、この堺の界限では評判の美人姉妹であった。特に姉の梅のほうは氣立てがよくて、習い事のほかに俳諧もたしなむ才媛である。

読者の方々には覚えておられるだろうか、喜兵衛の母の萬が俳諧の本を持ち歩いていたのを。元禄のこの時代になると、松尾芭蕉が俳諧を得意として、大流行りであった。其の俳諧は町人の間にも、もてはやされたのである。そのほかに井原西鶴の町人を題材にした浮世草子、近松門左衛門の人形浄瑠璃などが大ブレイクして、元禄文化が花開いていた。

三代目の娘の梅に話を戻そう。このように美しく氣立てがよくて、さらに才媛ときている。氣の強いのが玉に瑕である。梅は婿養子を迎えて、この天野屋を継がなければならぬと考えている。母親の滝の姿を見ているので、それは当然の成り行きだとも思っている。だがしかし、同じ婿養子をとるのなら梅の氣に入った殿方がいい。いくら父母が仕向けようとしてもこれだけは譲れない。

梅が目をつけたのが、船頭の喜兵衛であった。仕事熱心で、学問にも通じ、数字にも強い。さらに美術品や書画骨董に

も明るい。まさに、「スマートで目先が効いて 几帳面 負けじ魂 これぞ船乗り」といったおとこである。そして何よりもイケメンである。梅は船頭の喜兵衛にぞっこんなのである。

ある日のこと。梅は父親の三代目利兵衛と母の滝に、当主の部屋に呼ばれた。年頃の梅のことである。

「またあの話だ。婿養子のことには違いない。」梅は少しふさがちになった。母の滝が切り出した。

「梅、お前もそろそろ年頃になりました。婿を取るなり、嫁に行くなりどちらか決めなければなりません。」

「私は嫁に行くことは考えておりません。」

梅は船頭の喜兵衛となら一緒にいたいと思っている。

「そうだろうと思つて、私たちからの提案がある。」父親の利兵衛がぼそりと言った。母の滝がすかさず言葉を引き取つて、

「船頭の喜兵衛はどうかと思つてね。喜兵衛なら仕事もできるし、学問もある。この天野屋を任せてもきつとうまくやっていく。ねえ梅、どうだい。」

梅は、大いに慌てた。自分の気持ちと両親の気持ちが一致したのである。梅は喜びが顔に出るのをかろうじて抑えて、

「私は構いませんけど、喜兵衛さんが

わたしのことをどう思っているのか。こんな氣の強い女は嫌だと思つたらどうするの。」

梅は顔がニヤつくの必死にこらえて言った。父の利兵衛は、

「そのことならあらかじめ喜兵衛に氣持ちを聞いている。暫く考えさせてくれとのことだったが、先ほど承諾の返事をもらった。」

梅はそれを聞いて、天にも昇る氣分で、小さくガッツポーズをした。

「こんなに話が旨い事進んでもいいものかしら。さすがに私の両親だわ。見る目があるわ。あこがれの喜兵衛さんと夫婦になるなんて、ああ恥ずかしい。こんなにしあわせでいいのかしら。」梅は有頂天であった。

喜兵衛と梅の祝言は、賑々しく行われた。妹の琴も

「お姉ちゃん、うまいこと行つたわね。とてもきれいわ。喜兵衛さんはいい男だし、とつてもお似合いよ。私も喜兵衛さんのようないいお婿さんが見つかるかしら。」と混ぜ返した。三代目利兵衛とその妻滝も目を細めて、

「いい夫婦だな。これで私たちも隠居できるかな。あとは孫の顔をはやく見たいものだ。」と感無量の面持ちである。

(以下次号)

## 編集後記

広報活動をする者にとって、とてもうれしい便りをいただいた。ソレーネ周南に置いてあった残り1枚の会報を読んでの感想が書いてあった。コロナ禍で、活動が制限されている中でも、何とか広報活動を続けてきた甲斐があったというものだ。

自分たちの活動を針小棒大に表現するのは、まちづくりの会広報部の得意とするところであるが、戸田駅前花壇の出来栄は、花壇コンクールで優秀賞を獲得した実績が示す通り、自慢できるものである。これも会員有志が暑い夏を通して、水やりや手入れを怠りなく続けた成果であると思う。

手紙をくださったのは、周防大島町在住の、屋代島さとうみネットワークの田中さんという方で、浜掃除などで頑張っているとのこと。私たちの会員にも周防大島町屋代島から戸田へ嫁に来ている人もいます。いつか田中さんの会と交流ができれば良いなと思います。

### 発行責任者

会 長 神本康雅  
広報部長 木曾裕子

### 西徳山まちづくりの会

ホームページ URL:

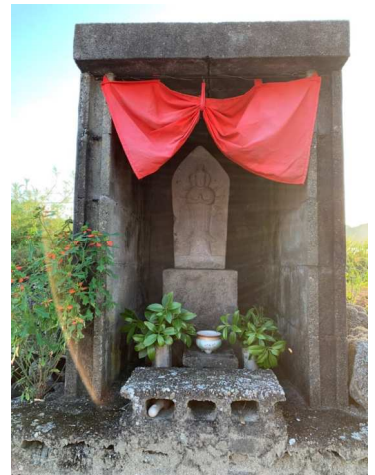
nishitokuyama.web.fc2.com

## シリーズ「名所・旧跡めぐり」

### 戸田の“馬頭観音”

明治9年（1876年）桑原から湯野へ石灰を馬の背にのせて運んでいたところ、菅原川を渡ったところで馬が足を踏み外して、道のそばにあった肥え壺の上に四つ足を上にして倒れた。さあ大変、壺は雨水がいっぱい、背負っている石灰が水を含んで熱く膨れ馬の背を焼くので、馬は苦しみ足をばたばたさせるが、どうすることもできなかった。村人たちは馬を哀れに思い、湯野・戸田の有志が馬の冥福を祈って馬頭観音を祭ったとのこと。地域の人々の情の深さに心を打たれますね。（戸田ふるさと紀行より）

国道2号ENEOSガソリンスタンド沿いの小道を川沿いに下ると、人丸様の隣に馬頭観音様がいらっしゃいます。



### 戸田駅前ビアガーデン

#### 「まちづくり納涼祭」を開店しました

令和4年7月23日（土）正午から、戸田駅前ビアガーデン「まちづくり納涼祭」を開店しました。参加者は、会員11人でした。

曇り空ながらも暑い日で、会長の進行で事務局員の乾杯を合図にBBQビアガーデンを開始しました。

メニューは冷たい生ビールに海鮮BBQで、ホタテ、イカ、サザエ、鯛、海老、カボチャ、玉ねぎを炭火で焼きながら美味しい、美味しいと食べました。「コロナが落ち着いたら、是非研修旅行をしよう」と研修担当に計画をお願いし、あそこが良い、ここが良いと楽しいひと時を過ごしました。



### 今後の行事予定

#### 戸田駅前広場周辺の清掃

毎月第2、第4土曜日の16時から、戸田駅前広場の清掃と花壇の手入れを行っています。

お手伝いしていただける方、大歓迎です。